

乳井貢の經濟思想について

宮本 眞澄

序

乳井貢の政治生活における最も特筆すべき出来事は、やはり何と云つても彼が主役を果したあの宝暦年度の改革事業であらう。この改革事業は、一時あればこの成果を享けて世人の絶讃を博しながら、その後間もなくあたかも砂上の楼閣のようにあえなく瓦解し去つてしまつたのである。この所謂宝暦の改革の「史的特質」、或は脆弱性、限窮と云つたものは、先ずオ一に当時における全國的貨幣經濟の進展と関連さながら、津輕藩の經濟構造を究明することによつて浮彫りにせざるべきものであるが、と同時にこの改革の主導権を握つた乳井貢の思想そのものを明かにすることによつ

て、より明確に把握され得るものではないか。なせなら宝暦の改革事業乃至政策には、当然の事ながらその理念的裏附として、彼の思想、殊にその經濟思想が反映されてゐるに相違ないからである。そこで、できるだけ改革事業と関連を持たせながら、以下彼の經濟思想について考察を試みよう。

最初、彼の學問的立場を見てみるに、實はいかなる學統に属する者であつたか、誰れを師として仰いで學問をみぎいたか、史料不足の爲、未だ明かにされてゐない。しかし全集に収録されている彼の著作名から伺われるように、彼は多方面に亘

つて興味を待たず、しかもそれをかなり深く研究して、いたと推測される。彼は当時の支配的學問、亦に宋學に對して強い反感を抱いていた、その半は次の文にもよく示されている。

「夫レ今ノ學者程朱ノ一言二下知ヲ受テ抑テ聖人ノ道徳ヲ見スシテ偏ニ聖人ヲノミテ其誤最モ甚シ、夫レ聖人ハ生レテカニ道徳ヲ具ル人也、其人ノ言ヲ聞テ始メ千人ニ道徳ヲ具トヲ知ル知テ而シテ後ニハ盡キトト喜ビニ口ニ有ルヘケレ、何ソ死シタル孔孟ヲ尊フニ足リ、生テ有ル吾レヲ尊ヒスシテ死シタル孔孟ヲ尊フニ尊ヒテ國家何ノ益カアル、」(全集十一卷二二三頁)

即ち學問の實踐性を尊重する彼は、問題が過去に存するのでなく現在にあるところなのである。又

「今ノ士ノ聖學ヲ國家ニ用ヒテ唯ソーコ獨身ノ爲ニノミスルハ是レ能レカ罪ソマ、皆皆上座學ノ罪也、故ニ孔子ヲ信スル者天下半ヲ過キテ未タ聖法ヲ用テ天下國家ヲ定メタル學者ヲ見ス、」(全集十一卷二二三頁)。

即ち學問はある個人の修身に終るべきものでない、身を修めた後に國家を治めるというようなことは、到底不可能である。學問は單なる個人の問題ではなくて、天下國家の問題である。學問はこゝも直さず國家治道の爲の學問でなければならぬのである、しかし學問がこのような本来的使命を離れて、個人の修養を專らにするようになったのは、朱子一派が心學又は理學を尊重し、そればかりを、しかも抽象的にのみ議論している罪である、このようにして彼はここあることに宋學に對して鋭い攻撃を向けてゐる。そして後述において更に一層明かにされるように、彼の學問、思想は著しく復古學的傾向を現わしているのである。しかし彼は決して偏狹な排他的復古論者ではない、たとえそれが朱子、程子の所説であつたとしても、もしそれが採用すべきものであつたならば、喜んで賛成を表わしている。例えば曲直のことを論じ呂氏春秋の「天道円地道方聖王法之」を引用し、天地に法る曲直を説明し、「朱子獨リ禮儀ヲ以テ莫直キヲ執ル誠ニ正説タリ吾レハ必朱子ノ説ニ從フ

しと云つてゐる。又迷悟について論じた箇所では「程子ノ禮ノコトヲ註シタル内ニ誠ニ禮ノ理ニ適等シタルコトモアレハ心ヲ盡スヘキコト也」と云つて、こゝでも又程子説の持つ意義をそれなりに正当に評語してゐるのである。従つて頑なに宋學を排斥する者ではなかつたことは明かである。しかし全体の傾向は古學派に近いものであつた。野村兼太郎氏によれば「徳川時代の経済思想ヲ大章附録ヲ開製」、これは当時祖宋一派の古文辞學派が大なる勢力を有してゐたので、その影響を受けることも少くなかつたのであらう。へ幸実、この時代には、青森・縣々沢、深浦等の港を通じて、津輕藩は大阪との間に海上輸送の便があつて、京都と絶えず接駁を保つてゐたであらうし、又上方、江戸の商人層の地方進出によつて、商業的にも文化的にも二つの地方が密接に結びつけられてゐたであらうから、僻遠且つ辺鄙の津輕藩にあつても上方、江戸の學問的文化的所産を享受することは、さほど困難ではなかつたと考へられる。又彼の學問實用主義の結果として古學派と共鳴することゝもあつたので

あらう。と云われているが、更にまた四代藩主信政公には山鹿素行に師事した事実があり（選益并日記、青森県史）、又同じくその時代に素行の養子山鹿高恒が藩の老臣として抱えられてゐることや、（山鹿八郎左衛門）老臣津輕政廣なる人物が素行の娘を妻として娶つてゐること（喜多利監史一頁、八二頁）、諸種の史料に記載されてゐる事実からして、山鹿素行と津輕藩との關係が非常に深かつたこと、従つて又素行が古學派の環境の中に育つたこと、その思想の形成過程においても古學派の影響を受けること甚だ大であつたこと、推察して間違いないのではなからうか。彼がいかに古學派の學説に共鳴してゐたか、その一端は次の文中にも偲はれるのである。

「熟考先聖没後三千餘歲ノ間ヲ觀ルニ聖人ヲ知ル者異朝ニハ孟子莊子ノ兩子ノミ、吾カ朝ニハ素行子祖傑子大宰純ノ三子ノミ、」（全集才一卷三〇四頁）。

試みに、眞が、その代表的著作「志學幼辨」において、自分の見解の正当性を證明せんとして

もしくは自分の主張を具體化し敷行せんとして、引用した古人の言説の頻度を今勘してみること以下のようになる。即ち引用箇所総数三十九の内、孔子関係のものが一十四で約五割強を占め、次いで孟子関係のもの、易関係のものそれぞれ同じく二、素行の聖教要録から二二、中庸から一回、老子関係のものが一となつてゐる、更に下と少くもつて、書經からの引用は五、五經からの引用は四、あとは全て頻度一回乃至二回、稀に三回となつてゐる。しかしこのような算出を待つのも亦、更に更に

「夫」詩經三百篇、禮記三十三篇説、易經三百八十篇、書經五十八篇、春秋二百四十二事、

論語四百五十八事、孟子二百六十章、七經凡

五十二十六卷、太史公史記八十五卷、七經凡

千卷、此等瑣屑事、類ニアルス、悉ク天下國家

ノ治道ヲ授ケル書也、是ヨリテ引用シザレハ即ち

内治道ノ精意ヲ盡スヘキ書ナシ、ト全集十

一卷一九六、一九七頁。

と述べてゐるように、彼の學問、思想は全体と

して着しく復古学的色彩を帯び、そのわけ古学派への傾斜が大であつたことは明白な事実である。勿論彼はこのように古学派の學説を通じて支那の儒教の影響を受けること甚大であつた訳で、その一、これは當時の學者の到底避け難かつたところである。しかし彼は決して支那思想を盲信する弊には陥つてゐない。當時支那崇拜の熱の最も隆盛を時にありながら、よく我が國の支那と相異なる氣を十分に認識してゐる。殊にその國体の相違を知り、たとえ孔子孟子の言といえども、もしその点において己れが見解に相容れざることを感ずれば、彼は敬祭としてこれを排撃してゐるのである。

「又湯ハ桀ヲ放テ武ハ紂ヲ誅ス是レ天ニ代テ其罪ヲ罰スト云フ聖人ノ言トイヘ此引用ヘカラス、吾カ國ニ於テハ臣ヨリ君ヲ罰スルヲハ逆ト又支那ニハ是ヲ順トス、又孔子嘗ク太司寇ト成リ相事ヲ攝行フ、政ヲ好ケラル、ニマテ寢ヲ脱ス、テ魯國ヲ去ルト云聖人ノ行ヒトイヘ此引用ヘカラス、吾カ國ニ於テハ臣ヨリ君ヲ捨ルヲハ

不義トス、又帝皇大舜ヲ學ケ天下ヲ讓リ天子ト
又聖人ノ教トシヘ臣民ユヘカラス、吾方國ニ於
テハ假令シ大徳ノ君子ト云臣幾夫可以テ王姓ヲ
改、天下ヲ讓ルヲハ不敬トス、支那ニハ是ヲ敬
トス、(全集才一卷二八八頁)。

更に彼の學問の傾向として指摘しなければなら
ないのは、その数学的傾向である。彼の全集に收
められた著作名を一瞥しただけでもそのことは容
易に理解されるであろう。我が國の数学の発達亦
この頃既に悪いの外に進んでいたことは、日本数
学史などの示すところを見ても分る。例えば我が
國の数学史上に燦然と輝く金字塔を打ち建てた和
算家關孝和ハ一六四二—一七〇八年ハ活躍した
のも、實より少し前の時代であつた。それはとも
かくとして、彼の經濟論などにも、精密とは決し
て云い難いが、数学が自在に適用されているので
あり、この事は當時としてかなり異色ある事柄で
あつたと思われる。

以上、彼の學問、思想の立場乃至特徴に關して
簡單且説明をした訳であるが、これによつても彼
がかなり多方面に興味を持ち、しかもそれらに相
當にこなして自分のものとしてゐる奥で、彼は豊
富な天賦に恵まれた才人であつたと想像される。
又彼の學問の傾向としては復古學的とりわけ古學
派的色彩の濃厚であつたことを指摘できるが、三
れも決して排他的獨善的なものでなく、他の學說
に對しても極めて合理的な彈力性のある態度を示
してゐたことに注目しなければならぬ。

二

さて乳井寛がその政治及び著作の生活において
主要な活動をなした時期、即ち宝暦を中心とする
前後の時代は、八代將軍吉宗の享保の改革を下る
こと既に数十年、徳川封建社会の内包する諸矛盾
が漸く顕在化し、諸藩に於つては藩財政の窮迫、
武士階級の窮乏がいよいよ深刻の度を増しつつあ
つた時期である。津輕藩としてこの例外ではない。
當時の津輕藩領内の經濟的混亂は果して眞自身の

目にはこのように映じていたであらうか。

「夫レ東照神君ノ武德ニ依テ千戈ヲ終ニスル
コト一百五十餘年、一中略一國之ヲ敗用足ラ
ス、仁君アリテ究民ヲ救フコト能ハス、一ツレ四
年ニ遇トキハ野ニ微狩ヲ極ミ城郭修スルニ及ハ
ス、群士甲冑ナク賊金匱等ニ宿リテ、^山下能ハ
ス、或ハ山林ノ良材悉ク費盡シ、^山國に
新足ラス一國ヲ盡シテ他邦遣ニ足ラセリト云ハ
是レ名ハ吾カ國ニシテ寧ハ世制邦、物ナクマ
シヘ全集才一卷一四三頁」

「君ハ安カラス民ハ空シ國ハ定ラズ四境國ヲ
ラス兵糧弱ク賊用足ラス是レカ島ニ吾カ國ノ山
林良材ヲ伐盡シ田畠穀産ヲ聚斂シ是ヲ他邦ノ商
家ニ送り金銀ヲ借り集メ返スコトヲセヌ是コ以
テ適足ラヌトシテ士祿ノ内ヨ減去シ民家ノ窮ヲ
虐取テ暴亦還スコトヲセス、」ヘ全集才一卷三
八二頁」。

悉くこの記事は、實が当時の津輕領内の實情
を急遽に書きながら記述した一般論であらうと思
われるのであるが、程度之差こそあれ諸藩も亦大

体これに類似した経済的困窮に陥つていたに相違
ない。だから、当面する経済問題も、結局、この
財政難をどのように打開して一國を富有ならしめ
るか、と云ふ氣に焦点が移られることになる。左
にはいうまでもないことである。しかしその財政
難の原因そのものについて種々なる議論があつ
た。最初は其點に關して次のような見解を有して
いた。

「廢刊刊權ヲ失フトキハ利權商家ニ在リ刊權
商家ニ在ルトキハ龍ノ雲ヲ得タルカ如ク士農工
三民ハ云ニ足ラヌ山林海陸ノ有物販賣悉ク商家
ニ利セラレ君ハ國用足ラス士ハ祿食乏シク農ハ
田畠ヲ墾セラレ君士農工千手束テ金錢米穀ヲ商
家ニ恩措スルニ至ル是レ國家ノ憂也、」ヘ全集
才一卷二九八頁」。

又
「敵ニ武門ノ威ヲ^{モウ}拘者ハ四民ノ間商家ノ私ヨ
リ大ナルハナシ、」ヘ全集才一卷四八〇四八二頁」
即ち武士階級困窮の原因を商人層の経済的勢力
の増大に認めているのであり、経済的權力を君主

から奪い一國の經濟を疲弊に導くものは、密輸入横暴に外ならないのである。彼はこの密輸入横暴の具體的形態を以下の如くに記している。

「今既ニ則權國家獨得テ權利故ニ已利セント欲スルトキハ或ハ是ヲ費シ或ハ是ヲ賤スルコト列國各異然ヲ結テ相ヒ通シ家ヲ置クコト微則ニ在シメ一是ニ損スルトキハ彼ニ利益シ彼ニ益スルトキハ我ニ利益シ其相ヒ通ツスルコトを望ム速シトモス、其運送支ルコト天下ヲ廣シトモス、萬金ノ重キモノ火ノ子ニ送テコト只一紙コト以テ馬トシ驛路ノ弊ヲ省クハ金銀貨器ニテハ夏」

「愛ヲ以テ是ヘ金錢」（譯者）「得ルトキハ甚其夫ハノコトヲ恐ル、故ニ得ル者ハ深ク藏シテ出スコトヲ慎ム、然レトモ藏スルノミニシテ是ヲ出サハルトキハ其利益ヲ得ルコト能ハス、故ニ其學ヲ通利シ其半ヲ常ニ貯ヘ藏ス、天下ノ富家皆斯ノ如クナルトキハ天下ノ金融其五ツハ通シテ其五ツハ空シク伏シ藏ル、是有レ夫空シキが如シ、愛ニ於テ天下自ラ天下ヲ以テ天下發兌スルニアラスヤ、是ヲ特定セントシテ天下

巨國ノ金錢ヲ錘サシメテ天下ニ散ストイヘ共、
本邦ノ伏藏シテ之クナル」（全集第一卷二八頁）

要するに、經濟活動においてその臨機定奪の商才を以て富を得た商人が、利潤の大半を私藏して貨幣の円滑な流通を妨げるから、天下が貧窮するといふのである。ではなぜかゝる好ましくないなる事態を生じたか。實にそれは結局次の二点に帰するのである。即ち、一つは、「其大率ハ米穀」註宮本「ヲ忘テ金錢賤賣ヲ賣フ」甚キ故」であり、その二つには、「夫レ天下ノ富家其五ヲ出シテ其利ヲ得ンヨリハ十ヲ出シテ其利ヲ得ルコト固ヨリ望ム所ノ通情也、然レ共人ノ爲メ二十皆失ンコトヲ疑ヒ恐ルレハ也此疑問カ故」（譯者）、人倫、欲不直ニシテ日夜叩奪ヲ事トレハ也、故ニ窮ス者ハ其儲ヲ執ルコト能ハスシテ損スルコトアリ、惜ルモノハ返サスシテ食ルコトア（ヘル故）」であるといふのであり、結局、問題を人間の主觀的欲望乃至倫理性の欠如に還元してしまつてゐるのである。勿論實のこの見解にも一理はあるが、論調がこのように倫理的、道德的色彩を帯びるのは、や

はり、当時の經濟論が今日我々が感ずる意味での經濟學とはやゝ趣きを異にし、従つて經濟消民論的性格を帯びざるを得なかつた必然的結果によるものなのであり、當時としてまことに正しき得ないことであつたのである。

このように、彼は藩財政の窮乏を武士階級の困窮の原因と、商人勢力の經濟的社会的進出に認めたのであるが、こゝで注意を要することは、實は、當時における他の經濟論者共しく、こゝしたように、經濟的混亂の原因を單なる奢侈や生活の向上に求めていないことである。(私が彼の著作を見た範圍内では奢侈や生活上の問題を正面から論じた箇所は一つも見つからなかつた。)この事は、一時的には彼には一番の政治權力を握つて藩政を左右した体験のあることを考之れば、まことに驚愕に面するものである。勿論、節約に依つて財政を救済することは、消極的ではあるが、最も健全なる方法である。しかし諸侯の如き地位にあつては到底これを實行し得ない状態になつてゐた。單に彼の生活が向上したばかりでなく、

江戸時代の社會状態が彼らをしてこれを實行することを困難にした。殊に参勤交替制度の如きは、内倉の收入の多くの部分を道中并びに江戸在府に消費せざるを得なかつたのである。又、奢侈を禁止し、身分相應の衣食住の厳禁を樹立するにしても、今のまゝでは十分に施行し得るかどうかは疑はしい。それはすでに實も指摘してゐるように、財用の權が商人の手にあるからである。商人が經濟上優位にある限り、如何なる制度を作つても、彼らに制せられてしまふのは自明の理である。實の側眼は既に無慮敵の裡にもこのよくな客觀的事態を覺悟していたのではなからうか。だから實は奢侈に対する後約を論じて次のように云い切つてゐるのだと思われる。

「是も亦物入り也費也者也トテ禁止セハ殆ント儉ノ道ハ人道ニ絶ツノ法ニシテ、妻妾禽獸ノ交リヲ行ハシムル也、レハ全集十一卷一八六頁」。

ところで、彼は、財政難の原因として再三に亘つてこの商人の横暴を指摘しながら、一方に於い

ては、その原因を更に政治の貧困そのものにも求められている。そのことは、彼等、因襲や伝統を打破する革新的政治家へ当時としては正にそうであった。そして政治の権舞臺に登場したことを考へれば、容易に察知せられるところであるが、それよりも、既述したように当時の経済論一般の傾向が経済と政治未分化の狀態にあり、従つてこの経済論が著しく政治論的色彩を帯びざるを得なかつたといふ必然的結果からするものである。

さて、彼によれば、一國の財政にしばしば甚大な打撃を与える凶作という自然の災害は、陰陽變易の道からする不可避的な現象であつて、人間の力を以つてしてはいかんともし難いものである。

「凡ソ得失空達ハ物ト形ト相ニ交接スル所ニ生セスト云コトナシ、人ノスル所ニモ非ス言カスル所ニモアラヌ物ト形ト相ニ觸レ剛柔相ニ由テ生ス、是レ陰陽變易ノ道ニシテ天地ヲ苞トス、聖人モ免レヌ故ニ天生ヌレハ養テス地養ヘハ茂ラス人民飢殍シ百物成テヌ是ヲ凶作ト云、是レ天地ノ吉凶得失也、レハ全集オ一巻ニニニニ

頁）。

「夫レ年ニ豐凶旱雨ノ失アルハ五運六氣ノ過不及有リヨリシテ生ス、故ニ陰過ルトキハ水災有リ、陽過ルトキハ旱災有リ、是レ陽過ルトキハ陰反ハス陰過ルトキハ陽反ハス陰陽相勝ノ氣化平分ヲ得サルトキハ五穀稔ラス人物損害ス、レハ全集オ一巻ニ六頁）。

このように、自然的災害の到来は、「五運六氣」の過不及によりする不可避的な現象ではあるが、しかしだからといつて、人間はこの災害をたゞ手をついて眺めている訳には行かない。災害による被害は最少限に食いこめなければならぬし、又被害の防止は人為的に可能である。そこで彼は次のようにいふ。

「人皆易中ニ在テ易ヲ知ラス今日ノ學者易ヲ學テ易ヲ知ルト云易ヲ知ラハ何ソ變ニ驚キ常ヲ失ニ至ルヤ、夫レ天地ノ變豈多端ニシテ限リナカランヤ、天地ノ變ハ雷震飄風橫雨旱魃暵是ノミ、人身ニ在テハ病疾鬪死亂心斷姓是ノミ、然レ是亦古今ノ通變ニシテ豈驚クニ足ランヤ唯

夕希ニ有ルト云マテ也、天祖ノ又シキ人世ノ永
キヨリ見レハ是モ亦常トスヘシ、(全集第一
卷二二二頁)

「是ハ天災による被害」註宮本「ヲ輔ル者、
人ノ力ニ在リ是ヲ以テ禮記王制ニ三年耕必有一
年之食、九年耕必有三年之食、以三十年之
通、雖有凶旱溢水、民無飢色、」云々、
是レ陰陽ノ升降過不及有テ年凶時凶王制「凶
民饑殍ニ及トイヘ凡三十年ノ通、當ヲ以テ、凶
ノ食ヲ足ラシムルトキハ其實凶年ニシテ人凶
年ナシ、是レ天祖ノ化育ヲ快クト云レハ全集
第一卷二六頁、」

だから、遂にいはば、凶作等の自然的災害によ
る飢饉飢饉という憂うべき事態も、結局は、政治
がその大體を充れて被覆に走つたことの結果に外
ならないといふことにちなり、こゝに支配者階層
としての武士階級に対して、政治的倫理的自覺乃
至反省が要請せられることになるのである。

「然レ臣人其常ヲモビ改其正ヲヲ夫ヲナシ、
妖災ノ變アラマスト云コトナシ、」(全集第一卷

二二二頁)。

そして、この主張は更に發展し、遂には彼を

一、

「況ンヤ一國ノ民邪辟天地ノ至誠ヲ穢スヲヤ、
人民ノ邪氣天地ニ感動シ以テ天變地妖人災物怪
亟^{よく}現ス、蓋是レ人ヨリ變ヲ成シ以テ自ラ苦ミヲ
作爲スル者也、」(全集第一卷二二三頁)
といひしめ、一種の天人感應説なるが如き見解
を採るに至つてゐるのである。

以上述べて来たところを要約するならば、彼は、
敗政難の原因を二つに分けて考へ、へどはいづ
れも、果して彼が意識的にこの原因を二つにはつ
き、分けて考へたかどうかは甚だ疑問である。むし
ろ、斯人の模倣も、大筋的思地からするものは
結局、支配者たる武士の責任であると考えていた
かもしれない。

一方を被支配者の
側からする商人勢力の経済的社会的進出に、他方
を支配者の側からする政治的倫理的自覺乃至反省
の天祖神政治の覺悟に、これら二つを求めたいとい
ふ得るのである。

さて、財政難を打開し、一國を富強せんことを爲には、いうまでもなく、上述べた二つの原因、即ち商人の横暴と政治の貪腐の問題を解消するに於て先決問題となる。しかしこれは一朝一夕にして解決し得る問題でもなく、又単にこれらの原因を除去するだけでは、財政難の打開も極めて漸進的なものとならざるを恐るゝであらう。だから、原因の除去を消極的の解決策とするならば、他方それと共に富國を強力に押し進める積極的の経済政策が樹立されなければならぬ。而して此二つに對して致したのは当然である。しかも此後はその對してどのような結論を打ち出したか、前記の二つの原因、特に前者即ち商人の横暴を寧ろ置いて、これに関連せねばならぬ見て行きたい。

ところで、経済政策には、当面の諸問題を迅速に処理してこれに一定の対処をけるための強力的政策と、それに加うるに、最終目標を達成するための長期的目的根本的政策の二つの必要とされ

ることはいうまでもないことであるが、後者の長期的、根本的経済政策に關していうならば、實は實政の獎勵彙達をその最大の眼目としていた。その書「隆治記」はそのした農耕改善の一手段を示す書であるが、その巻頭には次のようなことがいわれている。

「夫れ種藝ヲ貴フコトハ吾神教ノ隨一ナリ、唯吾邦ノミナランヤ先王モ亦然リ、生ヲ養ヒ民ヲ利シ國ヲ富マシ財ヲ足スノ源、種藝ノ道ヲ除テ何者ヲ是ヲ善クセン、故ニ古聖人ノ制ヲ建ツルコト是ヨリ約ナルハナシ、」(全集卷三卷二一三頁)。

「此故ニ種藝ノ道ハ國土ヲ辟キ四海ヲ富マシ財利ヲ足スノ源ナリ、故ニ古ハ天子諸侯后妃ノ妾子王臣卿大夫執事執事執事ヲ養ヒ民ニ耕農ヲ勸ム、」(全集卷三卷二一五頁)。

そして、いうまでもないことだが、その中で稲作も種藝とされている。

「種藝ノ間五穀ヨリ大ナルハナシ五穀ノ中稻ヨリ重キハナシ、」(全集卷三卷二一六頁)。

同時に彼は農耕における君主の役割の大なることを述べて、

「夫レ人ノ生命ヲ養フ者ハ食ニ在リ食ハ五穀ニ在リ五穀ハ農耕ニ在リ農耕ハ田土ニ在リ田土ハ君ニ有ス故ニ有土ノ君ト稱ス、此故ニ其耕ヲ務ムル者ハ農夫ニ在リ、其土ヲ耕ク者ハ君ニ在リ、其土ヲ辟ケコト大ナレバ五穀ヲ得ルコト亦大也、五穀大ナレハ民聚マル民聚マレハ金玉財寶滿ツ是ヲ君德ト云フ、」(全集十一卷二一七頁)。

といふ、更に又彼は農業振興を最も効果的に遂行するためには、「上を模して下を益する」といふ必要を説き、次の如くいふ切つてゐる。

「又ハ經ニ曰哉散スルトキハ民聚ル所聚ルトキハ民散マト云ヘリ、此故ニ禮藝ヲ爲シ散スルコト土壤ノ如クシ、土壤ヲ爲ムコト聚ル如クスルトキハ民聚テ業ニ進ム、民業ニ進ムトキハ土ヲ穡クコト豈唯百里ニシテ止ンマ、夫レ敗ヲ告ンテ種藝ノ道ヲ輕ンスルトキハ山林空虚トナリ田土荒蕪ス、故ニ農夫業ヲ失ヒ百工職ヲ

易フ是ヲ散民ト云フ、散民職業ナクシテ産ヲ食ル是ヲ游民ト云フ、夫レ國ニ百工空ク游民多ク國ニ農民寡ク散民多キ是ヲ無制ノ國ト云、無制ノ國ハ常ニ貧ス、國常ニ貧一シテ民定セサルハ未タ之百ラス、」(全集十三卷二一四頁)。

このように彼は登世済民・富國の最上の手段として大いに農業の振興を力説してゐるのである。勿論かゝる主張がなされる所以は彼自身

「此故ニ五穀天下ノ數ニ當ラサルトキハ民散始テ農利ニ走ル、農リテ得サルトキハ民聚シ害ス、欲シテ利セサルトキハ民盜ミテエム、盜テ求メサルトキハ民相ヒ殺ス、是ニ於テ法受自ニ出テ行ハレス刑罪目々ニ行ハレテ恐シス、老子曰民死ヲ恐レスハ何ヲ以テカ威ンヤト云ヘリ、故ニ天下ノ盜ミハ利欲ヨリ生シ利欲ノ亂ハ不足ヨリ生ス、」(全集十三卷二一六頁)。

と指摘してゐるように、「食」の問題亦人間生活において最も重大な問題であるために外ならぬ。しかし同時にそれは當時の一般の學者と共に彼も亦所謂穀本論の主張者であつたためである。

彼の資本主義的立場は次のような文によく示されている。

「天レ賊ハ盡ル期アリ土ハ盡ル期ナシ、其盡キサル土ヲ疎ニシテ其盡ル賊ヲ舊フ皆逆理之、土ヲ賣フコト神ノ如ク穀ヲ賣フコト君ノ如ク賊ヲ賤ニスルコト鬼ノ如ク利ヲ賤ニスルコト埃ノ如クシテ一月是ヲ行ヘハ國家ノ賤利上ニ歸セスト云コトナシ、一年行テ天下ノ賤賢君ニ歸セスト云コトナシ、」(全集才三卷二一八頁)

「五穀既ニ多ク就賤既ニシテ天下國は賤ニ空スルコト未タ之有ラス、天下穀ナキト下ハ人盡死又天下賤賣ナキト上ハ人盡富ニ成ルベシト云コトハ聖賢ノ言ヲ聞クニ二聖賢モ恥テ也、天下腐敗モ知ル況ヤ人君ヲバ況ヤ有司ヲバ況ヤ學者ヲバ、然ルヲ五穀ヲ投テ腐敗ノ賤賣ニ易田土ノ賤也スシテ有得ノ陳ヲ美ム是レ何コトゾヤ、此故ニ穀ヲ賣テ穀ヲ賤ニスル者ハ小人是之、賤ニ穀ニ穀ヲ賣テ者ハ良智ノ人也、」(全集才三卷二一九頁)。

「聖學ノ用ハ田ヲ耕シ穀ヲ收メ井ヲ鑿リ水ヲ求ルカ如キノ事藝也、心上理學ハ今日金錢便利

ノ重寶ナルカ如シ、庸俗ハ田ヲ耕スモ井ヲ鑿ルモ食モ衣モ生モ居モ治モ亂モ此金錢ナクシテ何ヲ以テ是ヲ調ンヤ、金錢ハ治道ノ大本也ト思フ誠ニ今ノ世ノ云爲ヲ以テ是レヲ見レハ誰カ是ニ從ハサル者アランヤ其大用ノ本ヲ忘レテ金錢ノ理學ヲ大本ト誤ルコト最モ至極ト云ヘシ、夫レ米粟ト器財ト交易スルトキハ遠近舟車ノ大用小用其持チ歩ビニ不自由ナル故ニ古ノ賢者小ク通シ安キヲ慮リ印簡ヲ作り是ヲ以テ通シテ萬物ト交易ナサシメタルマテノコト也、故ニ今金錢ヲ止メ紙板ニ印シテ用ル民亦可也、然レハ其實ハ本ハ金錢ニハアラス米穀布帛ニ在ルト云コトヲ知ラス竟ニ便利重寶ニ引レ迷ヒ其本ヲ賤シ其末ヲ貴ビ武蔵ヲ枉テ金錢ノ爲ニ商家ニ阿媚^{ヨメナリ}ヒ士農ヲ賤シシ西工衰フレ(全集才一卷三〇一頁)。

要するに、米穀は本であり、無尽である。これに反し財宝は末であり有限である。

しかし彼は農業を尊重する余り、他を排斥してしまふという極端な農業至上主義者でなかつたことは、四民を論じた際商人について、「百工ノ作

ル所ノ物ヲ受テ此國ニ無キ物ヲハ彼ノ國ヨリ受テ
来リ彼ノ國ニ無キ物ヲハ此國ヨリ運ビレバ此國ニ
其の存在意義を正当に評価していることによつて
も理解されることであるが、又商業についての
「商業利道」を始の商業に関する著作もかなり存
してあり、少くとも商業そのものの重要性に
ついてはこれを認めるにやぶさかではなかつたであ
る。

しかし彼の場合現状の商業を決して肯定してい
ない、正当なる商業に限つてこれを認め必要にし
ているのである。例へば前掲の「陸稻記」の中
で、

「古くはニ於テ孔門ノ學ヲ信マルコト四十余
年説ニ及テ思ヒテ經濟ニ重スルコト極止
マス、是ノ學問ヲ思フ曰三思有リ、一二日僅藝
ニ一日過誤三ニ日國定是也、」(全集十三卷二
一頁)。

種彦は商業に関するものであり、通説は商業に
關し、利道は利道である。又「商業利道」には商
業は國家を富にする手段であるとして次の如くい

ている。

「夫天下國土を富トクス者は誰タも君と商より大
なるはなし。君は利道を開き商は財利を通じ以
て天下の大用足らすと云ふことなかりむ、是
君商の二天命を盡す所以にして大業也、」(全
集十二卷三〇六頁)。

更に

「夫草木土石と云へども利を得て成長す、利
を得ざれば死シ、況や生物イナチをや、天地といへども
利を得ざれば滅却す況や人ぞや、故に政は國家
を利する所以なり、利は政を養ふ所以なり、政
と利と前後なし、二の者同じく出て名を異にす
」(全集十二卷三〇七頁)。

「日本四海廣く交易して我が國萬民の用を足
らしめ、君を安んじ國を富トクし家々を賑はすは帝
家の業なり、業は則天命なり、是を大商といふ、
大商は天下を富トクし國家の用を通ずる役なり、
士の能く及ぶ所に非ず況や君たる人ぞや、夫百
萬金の身上たりとも貧シとして利を取り經營経営とす
るは一文商也、大商の大耻とする所也、付本

賣電賣電の小商に何る異なるあらんや。しへ全
集才二卷三〇八(三〇九頁)。

といつて、自然界の森羅万象の成長も、人間の
成長も、共に利によつて始めて可能となるとし、
これ故に亦、政によつて國家を利し利を得て政を
善う。従つて二者同一である。又、諸大名に金を
貸して利を食るが如き、本末のあるべき姿の違
脱した商業は排斥するべきであるが、「天下を富
し國家の用を通ずる」本末の商業へは「大商」は、
決して批難するべきでは無く、むしろ積極的にこ
の應を説明して悉るべきものなのである。こ
に「賣の商業視乃至商人觀」といつたもの互明瞭に
向つてこそ立てざるであらう。しかし同時に、救々
は、こゝのような点にこそ、賣根本の思想におい
て電電主義を採りながら、その主張の基本線が次
半に弱くなつていく過程を認めざるを得ない。

四.

これでは賣がいうところの眞の商業道、眞の利
道とはどうゆうものなのか。彼によればそれは「

天に盈虚消長の變有り、地に豐凶有無の化有り、
人に損益得失の動き有り、此三の變有るを以て其
均きを成す」ところの「利道」のことであり、そ
れは又「變化の妙用」でもあるという。そしてこ
の利道は

「天地の物を生ずること常に餘り有て不足な
く、常に餘りなくして不足あることなきは中を
得ればなり、中は均しき所以なり、しへ全集才
二卷三〇三頁)。

「積すして餘り有り、故に増すこともなく又
減することもなし、猶井の水のごとし、用に随て出
ること限なく用止ては元のごとく散り益すこと
なく湛々として本を失はず、是を中を得ると云、
しへ全集才二卷三〇四頁)。

などの文中に見える「中」なる概念をその原理
とするものである。

もう少し詳細に述べるならば次のようにもなる
うか。天旭自然は中を得て常に過不足なきもので
ある。なほなら中は平均になる所以であるから。
そして、その「中」を堅く守つて、常に「定らす

といふことなく餘ることなく、他を「均しく養ふ」のが利道であるといふのである。従つてこの利道なる概念を商業道に持ち込んだ場合、彼のいう正しい商業とは、「我が國萬民の用を足らしめ、君を安んじ國を富し家々を賑はす」爲に、「日本四海廣く交易して」有無を通ずるものと意味することになる。換言するならば、萬民を豊かにするたゞに物資の円滑な流通を圖ることとする最大の眼目とする商業ではないといふのである。ところで、このような商業観の根柢には、人間の社会に於いて、もぐけり天竺白蓮の場合に同じく、本質的には物資の過不足はなく、たゞ流通に円滑ななく時にのみ不足という現象を生ずる、という考え方があることに注意しなければならぬ。従つて、それの当然の帰結として、彼の商業論は、最も流通論たる性格を免れ得ないのである。以上述べて来たのが眞の所謂眞の商業道であるとして、それでは商人が実際に商売するにはどうしたらいのか。眞はこれに答えて次の如くいう。

「物の相場と云者は天下の通にて已ことを得ざる俗間の勢なり、勅旋の重きもいかんともすることならぬ者也、今の相場の上り下りを苦にして悩なり、天下萬物の價均しからざる故に利する者也、貴賣りて賤買ひ賤買ひ貴賣ることば世界の人皆望むたること也、我獨覺えたる者の様に心得るこそ愚なれ、賤賣りて貴買うても同じ利に當る道理と云こと未知らば、何ぞ相場の上り下りを苦みあゆんや、此故に大商は相場の高下に苦します、相場の変化に應じて利すべし（全集十二卷三一〇頁）。

即ち、世の中には相場というものがあつて、それは人爲的には到底変へることのできないものである。しかしこの相場に拘泥するの余り、損得毎に喜憂し、曰く相場の高下に思いを致すのは眞に愚劣なことである。相場の高下にかゝらず、常にこれに超然として利潤をあげる方法を考へなければならぬといふのである。その方法とは商売に際して「定直段」を標準として損なきようにするといふことである。彼はそこで幾多の例をあげて

その具体的辦法を指示している。今その中から代表的
的條子の二つ選んで題を類推してみることにす
る。

○永代米一俵ヲ銀六十目宛ニ定テ賣ル法
（註中略）

假令ハ

米、兩ニ一俵ト定メテ賣ルベシ

金ハ一兩六十目ト定メテ用ヘシ

右ハ吾カ家ノ定価段ニ定メ、永代易サルトキハ

世上ノ相場カ高ク成リテモ下ク成リテモ更ニ措

ナシ、ト申略

或人問テ曰

第一俵相場銀四十目

府一俵相場銀三十目 駄一俵ニ三文目宛ノ儲益

一兩相場銀八十目

如レ此ナルト千假令ハ米二百五十俵ヲ賣ルニ

一俵六十目宛ニ賣ルコト其衝ノカン。答テ曰左

ノ如クセヨ

の米八百二十貳俵 是レ母米氏元米氏云也、即

中數也

賣ル米二百五十俵

石母米へ賣ル米ヲ加ヘ十の七十二俵ヲ郊ノ四十

目ニ賣レハ

代銀四十二貳八百八十目ヲ得タリ

此内

駄銀十の七十二俵分 三賣二百十六兩 一俵三

文目ツツ

賣米二百五十俵ノ代銀十五賣目 一俵六十目ツ

ツ

右二口引テ殘銀二十四兩六百六十四文目有レ之

此有銀ヲ以テ府ノ相場三十目ツツニ賣レ戻セハ

八百二十二俵ヲ奉ノ如ク得テ、其母ヲハ失ハス

シテ賣リ本二百五十俵ノ代銀十五賣目ハ半二入

リタリ、是ヲ結末檢約ノ勘定ト云。ヘ全集廿二

卷九四（セビ賣）。

ヘこれ以下、それ／＼の相場の高下に依じて、

やはり「永代米一俵ヲ銀六十目宛ニ定テ賣ル法」

として四例あげてゐるが煩雜になるので省略する。

今挙げた例は、相場の如何にかゝわらず米を常

に一定の値段で売る場合であるが、次に一定の値

段で買の場合の例を掲出してゐる。

「この永代米一俵ヲ十匁ニ定メテ買ヒ入ルル法
是ハ米ヲ買ヒ入ルルコト也 上ノ相場カ高クテ
モ寧ニテモ構ヒナク米ヲ買ヒ入ルルニ一俵ヲ
十匁ニ買フ術也、前ニハ賣ル術ヲ云、是ニハ買
フ術ヲ云也。

式人問答曰

府ノ相場 一俵三十五匁 駄賃一俵五文目ツツ
郊ノ相場 一俵四十八匁 若シ郊ノ相場變シテ府
ノ相場ト同シク一俵三
十五匁トナ
スハ如何 府ノ相場如レ此ノ時米四百俵
ヲ買ハントスルニカン。
府ノ相五匁ト郊ノ相十八匁ト合ハ十三匁内吾家
ノ定賣十匁ヲ引算ト十三匁是ヲ買米四百匁ヲ乘
シニ萬八千二百トナルヲ買トシ郊府ノ差十八匁
ノ内駄賃五匁ヲ引算リ八匁是ヲ法トシ賣ヲ除キ
紐ヲ知ル
(米表)

答テ曰

母米三十六百五十俵

是ヲ郊ニ賣リテ其四百俵ヲ一俵十文目ツツニ當

テ買ヒ得ル也、勘定即五ノ如シ、三十六百五十

俵ノ代銀

四百七十五匁二百目 一俵四十
八匁ツツ

内

一 十八匁二百五十目ハ駄賃拂フ
一 十五匁二百目 四百俵買入レノ返リ銀一
俵三十八匁ツツ取ルカ
右二口合テ三十三匁四百五十目ヲ引
残銀百四十匁ト百五十目有レ之
此殘銀ニテ府ノ相場三十五匁ニ米ヲ買入ルレハ
四十の五十俵ヲ得

内

一 三十六百五十俵ハ元ノ母米返ル
一 四百俵ハ買入レ米ナリ、ハ全乗ヤ二卷一
二一〇四匁。

ハ以下これに類似した例を九の挙げてあるが、
これも長くなるので割愛する。

ハ更にこの方法の骨髄ともいへべき母米・父米
の算出法に關しては、「歷今志下」ハ全乗ヤ二卷
一ニ九一〇四匁に於いて表に詳細な説明をな
しているものであり、この算出法に精通してこそ、
始めて上記の方法の時の意義を明かにし得ると思
われるのであるが、しかしそれはあくまでも数字
上の問題であり、そこで返立を入つては本論文の目

的からいざゝか逸脱することにならうと思われるので、こゝでは母米・父米の算出法を紹介することと致し、たゞこれに關して注意すべきは、それ相場思想の影響を非常に強く受けているといふことである。

註(1)

父米一俵ヲ銀六十目宛ニ定メ賣ル法

米相場一俵

地方……四十目

都會……三十目へ但駄賃一俵につき三文
賣る米二百五十俵ヲ元米へ或は母米へ八百二十
二俵ト千七百十二俵と地方の相場銀四十目で売
ると代金四十二匁八百八十目を得る。その内
駄賃銀三匁二百十六匁と売米二百五十俵の代
但し一俵六十目で売ったと假定して銀十五匁
三厘引くと、その發銀は二十四匁六百六十四文
目となる。それで都會の米を賣れば元米の八百
二十二俵を買戻すことが出来る。結局二百五十
俵を定直段一俵銀六十目で売ったことになる。
父代米一俵ヲ十匁ニ定メテ買ヒ入ルル法

米相場一俵

都會……三十五匁へ但駄賃一俵につき五文目

地方……四十八匁

母米三十六百五十俵を地方の相場銀四十八匁で
売ると代金百七十五匁二百目を得る。その内か
ら駄賃銀十八匁二百五十目を買入米四百俵の代
十五匁二百目を差引くと、その發銀は百四十一
匁七百五十目となる。それで都會の米を賣れば
四千の五十俵を得る。それから母米の分三十六
百五十俵を差引いた残り四百俵を買入れ米とな
る。

★但し これは「米一俵三十匁ニ定メテ買ヒ入
ルル法」ではなくて、「都ノ相場ヨリ十匁安
ク買ヒ入ルル法」と題すべきだろう。

五

彼のこの議論は單に商業上だけでなく、一國
の財政上にわいても同様のことを主張している。
故にその著「國家財制」にも先ず勢頭に「國量平
分規定価ヲ建ル事」を論じ、それを基本として、

「米金出入益ニ於テ損シ彼ヲ益シ入用ノ米金利益
スリ則チ」と題する財政運用の法を論じている。こ
のように、彼の議論は単なる商業上の議論として
とらまることなく、国家財政の運用に反響してい
るというところに大きな意義がある。

ところで、かゝる彼の議論のキーポイントとな
すものは、右の例からも明かきように所謂母米及
至父米といわれるものである。だから、この母米
・父米を抜きにしては、彼の議論も五んら意味を
なさないのはいうまでもない。いわば母米・父米
は彼の議論のケルンとも稱すべきものである。勿
論、彼は、この母米・父米の算出法に關しては、
實に微に入り細を穿つ程の詳細且つ周到な論述を
試みてゐるのである。その数学的正確さという
点では、何の疑問をさしはさず余地がないであらう
。しかしこゝで問題となるのは、算出された母米
・父米をいかにして入手するかということである。
なほなほ、彼の算出法に従えば、母米・父米の額
は、實際に売買を必要とする米の額の数倍から十
数倍の多きに上るのであり、数字の操作の上だけ

では容易なことには相違ないが、これを現実の問
題として、特にそれが多額の米穀を取扱ふ藩の財
政上の問題である場合を以て考えた時、母米・父
米の入手の算段は軍に並せねばならないと思
われるのである。要はこの疑問に對してどのような
に答へようであるか。彼が手塚某に与えた「通賦
一事凡例」の中に次のような記載があるのをご
に抽出してみたい。

「一年の有餘米を裁上主上にて專切にして國
民の飯米かと酒造る分許廻廻于境內にする分は
かりつゝその合て渡し應に、其外は裁上主取
りて上の用とすべし、民間にてはいか程の習俗に
ても專切られて居ると云ふことは決して知るこ
と叶はず、唯町人有情の者は米は澤山世上に有
るが、一年家内飯米の外米を賣ふことのなる
めとて裁の如く思ふのみ、故に上に賣切りた
るもて彼に上の藏へたものとせしと取納めさせぬ
もの也、大問の圖を取る様に其賣りたる者へ預け
置き、御用次第差上ること申付るがよし、」(一
全集才三卷三〇頁八頁)。

「一 右米を賣上るには相場よりいづれも賣價に付五文目増に賣ふ也」

「一 上の米とは是を五仙部に賣るもの也」

「一 若し五仙部より造り米等有り之時は、一季の所を斷り立て二年より返納相違すべからず、三年に至りて、始て上の有と立返る也。既に上の有に成りて而して後に制度を立つべし、其制度又右に示すべし（全集才三卷三一の頁）」

これは改めて説明するまでもなく、既に述べた宝曆の改革における貢納諸政策の理念の裏面にはなすものがあるが、とりわけここに書かれている畝米・父米の收藏の手段は、一々論議はできないが、父米という言葉を聞いてはいないが、其の諸改革中最も注目すべきもの、廻米停止と、米を始りとする諸物資の強制的上納という異例の政策三想起しめずにはおかない。そして、この文章に具現化されている彼の経済政策上の根本理念は、一言にしていえば、商人に対する懐柔の上に立つた專制的統制経済を意味するものに外ならないのである。そして更に亦貢は、その経済政

策が円滑に実行されるためのいわば前提ともいふべき色々な条件がこれに附しているのであるが、それらも仲々興味深いと思われるので重要なものを次に掲げてみよう。

彼は先ず最初に「右の如くにせんと思はゞ、家中の士祿地を以て任正地もの也」といって、家中に祿地を有することの反対し、その理由を次のように述べている。

「惣じて地を領する者は諸侯のみなり、然るに僅に五六万石を領する諸侯も、是は舊地を承て士祿を興ふるに甚よからぬこと也、」（全集才三卷三一の頁）。

「此故に御藏地檢地など打交り、給地は其家々舊例の制を以て百姓を取り扱ひ、或は代官庄屋以上の制令を以て百姓を扱ふ故に、一人の百姓制を受けること區々にして百姓の惑ひとなれば、散々よからぬ事也、或は給地の地頭無理非道の仕方等もありて公事訴訟などもこれあり、」（全集才三卷三一の頁）。

實問題として、諸侯の直轄地と藩士の給地と

「踏破していることは、幾多の厄介な問題を主として」とである。又

要するに、今迄の收穫を六分、四分に分ける方法で止めて、田畑そのものの五公田六、私田四の割合に分け、公田からの收穫をそのまゝ田租とする。従法に改めるべきだといふのである。そして又年貢を半額に限定し、国内の諸産物を産出額に応じて徴するべきであるといふ。現物納の立場に立つて

「怒じて國土の產物國中の民我爾儘に取らぬ
二、米穀の作り取り亦正ぬと少しも違はず、
先ず君に擇けて而して後に民間に交易すべきこ
と也、其定めは物の產數に因り、或は民の利得
を量りて或は十分の一或は五分の一など定むべ
し、主も亦へは上の用今三分け別に役々定めの

て出さしめ、餘分を民間へ下し賜はる如く止せ
れは武士の都の詮察し。」(全集十三卷三十一
頁)。

以上を以て、更にはこの運上役銭取りの禁止に關
連して、(1)町人からの地子銀をも禁止して役と勤
金とを以て止す、(2)庄馬人足に儲錢を渡すのを止
めてそれと換金とを強調して次の如くいう。

「町家市店に居る者は町工商人足也、是は今
も地子銀に云毫を上へ納む則是町重也、其高は
町重を以て年貢を上納する事はなほめに依
て地子銀の居る所を以て地子と云也、是も金銭
の取ることと止めにして役と勤とを以て定むべ
し。」(全集十三卷三十一頁)。

「町家市店に居る者は町工商人足也、是は今
も地子銀に云毫を上へ納む則是町重也、其高は
町重を以て年貢を上納する事はなほめに依
て地子銀の居る所を以て地子と云也、是も金銭
の取ることと止めにして役と勤とを以て定むべ
し。」(全集十三卷三十一頁)。

しくど有る故實をばがれ迷惑もあらんとてぐかま
しからば米にて遣し錢にて渡さぬ様にしたる者也、
(全集十三卷三十一頁)。

このように見て来る時、徳川幕藩体制を瓦解に
導く貨幣經濟の浸透を食ひ止めるのに彼がいか
に苦心したか。そして又彼がいかに強く本来の自然
經濟への復帰を希求していたか、自下から明瞭と
なるであらう。

更に又彼が武士階級を困窮に陥れる最大の強敵
として再三に亘つて指摘しながらも、最早その動
かすべからざる勢力、実力のためにはある程度の
妥協も余儀無くせざるを得なかつた町人階級に對
しては、どのような政策で以て対処しようとし
たのであらうか。即ち、

「今町家所得の者は多くは田地を買取り新得
する者あり、是豈も日本も古より禁制の第一也、
是は本買求めたる直段に利足いか程にても付て
上より買もとし本人へ返すべき事也、」(全集
十三卷三十一頁)。

町人勢力の増大の現象を特にその田畑兼併の過

程に補え、この重大な事態を解決する最上の万策として、藩当局が町人から田畑を買上げ、これを再び農民へ返してやるべきことを説いているのである。このようにして、町人の商業資本が農民の唯一の生産手段たる田畑に反発のを防止した後、

「某君の領分に港在り諸國の商船産物を積來らば、我が國に在き物は皆上に買ひ上げべし事出、レへ全集才三卷三三四頁」

として商人が直接商品の流通過程に入り込むのを防止し、かくすることによって町人資本の専横の下に抱き込まうとしたのである。

以上、寛永時代の経済政策をスミマに整理していく上で述べたされねばならぬ条件として列挙したものの中、特に重要と思われるものはいくつか摘出してみた訳であるが、これらの諸前提条件が解決された時こそ、始めて寛永理想とした自給自足の自然経済が現実として可能となるのである。彼はその理想とした状態を次の如く描いた。

「國中諸産の年貢が有り 國中有餘の米穀は賣ひ盡したり、百工より雇夫に至る迄其便所

の役は定りたり、此三の者既に上の掌裡に束ねて置る時は、上にて錢一文金一歩を使ふ日とて年中に何れの時にも有ると熟を尋ねて早太、神社湯田神社家屋の修理より道橋駄番衣服飲食等に至る迄田用の間一文の錢を出してすることなし皆官物也、レへ全集才三卷三三三頁」。

「錢金に云ものは民間通用の爲に工夫し持へたるものに交易の持賦りに重寶にしたるもの也、レへ同右」。

「天下上の恩我が國境を出て他國に行く時と民の爲に通賤の道を開てやると此二つに少し斗り入用也、故に常に三つの一は上に在らしめ三つの二は下に在らしむる也、レへ同右」。

「上にて錢使はぬ様になれば家中の暮らしも味噌薪油糞村木綿小間物蠶糸の類迄も町家より求むるに及ぶべからず、仔細は上に有る知行の産物有餘大抵度量するに五分の一は有餘あれば其餘は畜へて何の詮もなし、是を家中の諸士に下し賜はるべし、レへ全集才三卷三三四頁」。

即ち経済生活は全て國産の現物を以てして営

まれ、貨幣は最早資本としての機能を喪失して、単なる流通手段・交換手段としての機能より有していない。従つてそこには商人が跋扈跋扈する余地も残されてはいないのだ。農民は全く賣を手にして農耕にはけみ、藩内には物の不足といふことはない。産物は常に余裕がある。上も安泰であれ、下も又平和である。このような状態こそ眞の理想とした自然経済にはかならぬかたのである。

六

以上、乳井寛の思想に關し、特にその経済思想に力点を述べたが、甚だ雑然として統一のない説明をして来た訳であるが、これを述べて来たところに一応まとまりをつけてみる意味から、そして亦改めて彼の経済思想の特質を考へてみる必要からも、こゝで彼の経済思想全般に亘つて概括的な記述を試みたい。

乳井寛の経済論の根本というのは、封建経済に寄食してそれを腐敗せしめる商人の高利貸資本の抑制、一層純粋な自然経済への復帰を主張する封

建的、保守的理論であり、この種の資本への依属から武家経済を独立せしめようといふ武士の希求の表現に過ぎない。その際一層未発展な、即ち商品と共に金貨などの一掃しない、より純粋な自然経済の確立、又はそれへの後退的理想として提唱された限り、夫は商人資本を知らなかつたやうな王代的自然経済理想として現われ、かくて王代謳歌の傾向が著しくなつた。

このように彼の経済論は根本的にはあくまでも自然経済を理想とし、老練の世の王道天下を最終目標にしてゐたのである。しかし天禄以降すでにはありの貨幣経済が達達した当時において、現実の社会を一章にさうした古代支那の理想社会に復帰せしめることは、到底不可能なことであつたのである。實もこの事はよく認識してゐたようである。そして彼は、短期間とはいえ、一藩の政治權力を掌握して遷改を左右した人間である。現実の問題としてそれがいかに至難の術であるかを理解してゐなかつた筈はない。

従つて彼の経済論は根本的には自然経済を理想

とした農本主義の立場を保持しなから、それが、財政改革方法というより現実的な経済政策論となつて現われた場合には、自己の理想と現実との間に生ずる摩擦を最小限度に食い止める爲に、どうしても現実との妥協譲歩という線を辿らざるを得なかつたのである。だから、既に見て来たように彼の経済論は、貨幣経済の発展と共に成長した町人勢力の増大に対しては、これと正面から対決しようとしたものではなく、むしろこの現実的勢力との衝突をできるだけ回避しながら、妥協を図り、結局はこれを武家の権力下に置いて、最大限に利用しようという意圖を帯つていたように見受けられる。

彼は、自然経済の腐蝕、従つて武士階級の困窮という徳川幕藩体制にとつてこの上ない重大な事態が、当時の學者が再三に亘つて指摘したような単なる奢侈という問題にだけ起因するものでなく、商品経済の発展に伴う商人の高利貸資本の浸潤という客観的社会現象に原因を有することをほつきり認識していた。そして又彼は、この現象が、客

観的な時代の趨勢であるだけに、到底一朝一夕にして払拭され得るというようなものでもないことを同時に自覺していた。つまりめていふと、彼の経済論は根本的にはあくまでも農本主義の立場に立ちながら、實際上の経済問題を論ずる場合には、どうしても時代の趨勢に抗し切れず、従つて著しく現実妥協的変容を遂げざるを得なかつたのである。

だから、彼は、他の論者のようには奢侈に対して使約を力説するようなこともしなけれど、又時代の流れに逆うような武士土著論をも主張することとはなかつた。この点同じ古学派の系統に属するとはいへ、荻生徂徠などと大部趣きを異にするものである。勿論眞は徂徠に見られる程の徹底した貨幣論を展開することはなかつた。その論述は一面極めて抽象的であり、散漫である。しかし現実に対する洞察にかけては眞は徂徠にそれほど劣るものではなかつたと思われる。或は眞は当時既に崇拜する徂徠の土著論を学んでいたかもしれない。しかしもしそうだとすると、眞にはそれが殆んど

無謀に近い企てであることが分つていたらしい。よし土着論が実行し得るものであつたとしても、それは一挙になし得るものではない。しかし實際武士の財政難は焦眉の急であつて、施すを許さない。このことを夏はよく自覚していた。

それでは当面の武士の財政難を解決するためにどうしたらよいか。それには目前に必要金銀を調える金儲けの最良の方法は商業によるより租に途はない。藩がその產物を自ら賣ること金金を獲得する最捷径であると夏は考へるに至つたのである。それには、武士自身がこれを經營するといふよりも、商人に請負わせ、その利益を藩が吸い上げようとした。増言するなれば武士の厳しい統制の下で、商人の持つ機能は最高度に迄發揮せしめ、これがもたらす利潤を藩は獲得しようとしたのである。つゝに至つて夏の論は蒼白なものが主張した商業藩營論にかなり類似した色彩を帯びることになるのである。そして又彼のこのような議論は、我々に、宝暦の改革における国産奨励と商業重視の諸政策の理念的バックボーンが果して何で

あつたか否、暗黙の裡に示唆してくれるのではないだろうか。

二のように夏の見解に加うるに、彼には又優れた数学的文能と素養があつた。そこで彼はその算法を自在に駆使して自己の經濟論に迄応用したのである。そのため彼の經濟論、殊に財政論は、その数学的裏付けによつて一見より現実的且つ実践的妥当性を有するが如くになつたことは否定できない。

このように、夏の經濟論がよく現実を踏まえて、かなりの実践性を前提とするものであつたことは、既述の通り、彼が宝暦の改革にあつて商業資本家と高利貸を極端に排斥せずに、むしろこれと提携し両者の共生を図つた事実によつても立證されることである。しかうは彼の經濟論に見られる現実性乃至実践性はどのような点にその根源を存するのだろうか。

その解答としては一応、彼の經濟論の基底をなす世界觀乃至學問的立場そのものが、実践を重んずる實用主義の立場に立つものであつた事實を指

的に、よき支配者階級の立場からなされたものであることに相違はなかつたのである。このように彼の議論が基本的には支配者階級としての武士を擁護する立場からなされたものであるという制約は必然的にその議論の現実化、実践化を不徹底に終わらしめることとなつたのである。なほなほ、支配者階級の利益とその時代の歴史の方向とは必ずしも一致するものでなく、むしろ時代の進歩に資して両者は益々相背反することが多いからである。即ち、支配者階級がその既得の利益を守ることに固執すればするほど、彼らと時代との間の懸隔が大きくなるのであり、従つて又彼らはそれだけ歴史の流れから遊離することにもなるのである。だから、寛永支配者階級の立場を捨てることはできなかつた限り、その議論がいくら現実へ大きく傾斜しても、又時代の流れにできるだけ順応せんとするものであつたとしても、そこには必ずしう不可避の限界があつたのである。

寛永あればとまでに自己の理論の現実化、實際化を図つて努力しながら、結局はその階級的立場

の故に限界を有せざるを得なかつた訳であるが、しかし他方このような傾向を更に押し進める上でのかなり大きな要因となつたものに老莊の思想よりする影響があると思われる。しかし老莊の影響はそれだけ寛永の経済論を制約したかに留めておき、自身のある結論は出さないか、ここにかゝる寛永老莊の世界観、人生観にかなりの共鳴を承けていたことは事實であり、この老莊思想の論理的側面の影響を受けての結果、一種の安んじ命といった悟りが、漢学としてはあるが彼の経済論を支配し、そのためにその経済論が勢い迫力を失うものになりてゐることは否定出来ない。勿論だからといって私は寛永の進歩性を頭から否定する訳ではない。寛永朱子学をばけ古学を採用したということ、それは、彼が幕藩封建制度それ自体の觀念的な表現であつた近世朱子学が封建制度の矛盾の顕在化に伴つて、無力化していく過程を認識し、最早信頼を失つたこの朱子学の代りとして、より一層現実には有効に働きかけ、封建的諸關係を再確認する古学の孔孟に直接的に復帰したことを意味するものに外な

らない。又莫は、封建制度の経済的荷い手であり、当時の人口の約九割を占めていた農民に対しても、多くの学者や急政者がそうしたように、農民興味論或いは農民憐憫論の態度を採らず、むしろこれが果す経済的社会的役割を積極的に高く評価しようとしている。この二点からだけでも莫の莫の程度の進歩性、進取性を十分認めることが出来ると思ふ。

たゞしかし彼の進歩的側面を物語るこれらの点も、やはりそこには大きな限界や制約を有していたのであり、この限界や制約の存在の故に、彼の議論に犯られる進歩性も、実は彼の思想の根本にある封建性、保守性を十分に被り切れなかったことを認識しなければならない。なるなら、彼が仮りに未字学に対して痛烈な批判を下し、これに代えるに古学を遵奉したとしても、その古学自体が支配者の新しき思想的政略として、目前にある封建制度の現実をその予言のまゝに説明したものに過ぎず、その限りに於て何ら新しい時代の要求を反映するものではなかつたのである。又農民の役

割を高く評価したとはいへ、しかしそれとて結局は農民を単に支配者階級を経済的に支えるいわば封建社会の生産的土台として評価したまでであつて、決して彼らの本来の意味での生産者としての社会的機能乃至存在意義を認めたものではなかつたのである。だから、彼が農民に対する支配者の苛政誅求を戒め、又君主の仁政を説いたとしてもそれは根本的には支配者層の利益を守ることを目的としただけのものに過ぎず、農民に対する莫のビューマニズムから発したものでなければ、農民の要求や願いを考慮に入れての上でしたものでもなかつたのである。

このような考察を重ねて来る時、莫の経済論の本質は、かなりの実践性を有する当時としては随分と優れたものであつた。皇室の改革派、一時的とはいへられただけの実績をあげ得たのも、やはり或る程度彼の理論の実践性に基づくものと思われる。にも関わらず、彼が終始支配者側に立つて経済を論じ、それが意識的たるか無意識的たるかを問はず、又彼の経済論の空極的目標が王代

自然経済への復帰にあらたな限り、そこにはやはり避けることのできない限界があったといわざるを得ない。たゞそれがいかにも普遍妥当性を有するが如き印象を与えるのは、既に何度も指摘したように、彼の理論が常に徹底した算法の適用によって数字的裏付けを与えられているためである。

彼の経済論の本質は、正に彼自身の「夫天下國土を富む者は誰ぞや」と語より大なるはなし、という言葉に集約的に表現されていると思われるのである。即ち、「君」とは彼が理想とした世界の自然経済を指向するものに外ならないし、商とは、当時の発展する商品経済とそれに伴う商人勢力の増大を、農平養が無視し得なかつた事実を物語るものである。この矛盾する二つの事柄が、彼の経済論の中に同居しているところに大きな意味があるのではなかろうか。かくして、彼の当面の課題というものはこの両者の妥協調和を図ることに存した試みであり、更に彼の究極の目的は後者、即ち貨幣経済を消滅せしめ、前者、即ち王代自然

経済を再現せしめることにあったことは改めて強調する必要のないところである。そして又ここに我々は、理想と現実との間に板ばさみとなりながら、両者の妥協点を見え出そうと努力した痕跡をなし、しかしそれが激しい苦悩の姿を呈しているのである。

しかしだからといって、養が藩政史上に果たした役割と、彼の経済理想が江戸時代経済思想上に占める意義を一概に過小評価し去ることは許されない。たしかに今日から見れば彼の経済論は保守的であり反動的である。しかしこれを養の置かれた当時の時代に溯って考えてみる時、そこには、保守・反動の言葉を以てしては片づけられぬ、何物かを、認めることが出来るのではあるまいか。当時において、封建制度への批判は、寧ろ歴史的本仕方で行われたといわれる。養は、批判とまではいえないにしても、やはりその否定的封建制の現状に対して、激しい不満と憂懐を露わしたのであり、その結果として翌年には王代の

自然經濟を究極の理想とするようになって来た。だが、近代的思想の発達を促す契機の小かつた当時の社会状態を、又彼が支配者層の頂点に立つ政治家であつたことを考慮する時、彼がそのような傾向をとるに至つたのもけたし無理からぬことであつた。しかしむしろそのことよりも、かゝる大きな制約の下にありながらも、常に旺盛なレジスマンス精神を以て封建制の衰退の矢面に立ち向かつた、實の現象への対処の仕方そのものに彼の独自の意匠を思へ出すべきではなからうか。

主要参考書

- 野村兼太郎 「徳川時代の経済思想」
 同 「日本経済思想史」
 永田廣志 「日本封建制イデオロギー」
 古川哲史編 「日本思想史」
 武内義雄 「中国思想史」
 奈良本辰也 「近世封建社會史論」
 中村吉治 「日本經濟史概説」

全書所収の著作名

- 「志学幼辨」、「大字文盲」(以上才一巻)
 「周礼通用」、「応分志」、同別本、「経國度要」、
 「度量分数」、「節用則」、「國家賦制」、「識鑒
 問答」、「商家利道」、同別本、「慈名御」、(以上
 才二巻)
 「太極図説」、「象数」、「易象」、「夫妻制」、
 「定分録」、「王制利權之方」、「王制利權方」、
 「利權主客之位」、「淫指記」、「損益指導」、
 「手殺多務節用」、「朝日而已可」、「通財一事
 月訓」、「得失問答」、「制地考」、「換地法」、
 「養地政」、「賦制述」、「賦制規矩」(以上才
 三巻)
 「丁見術細目図解」、「図術算法方四伝」、「初
 学算法」、「觀中算案」、「版算」、「五義論」、
 「津輕名臣伝」、「深山恕次」、「可樂詠哥集」、
 「餘録」(以上才四巻)